

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町 1 - 1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043 (223) 3005
発行日 毎月 1 日
平成 30 年 8 月号

頑張る産地



JAきみつにおける加工業務用野菜拡大への取組

君津農業事務所 改良普及課
主任上席普及指導員 宮木 清

JAきみつ管内の田畑を活用した加工業務用野菜の取組が拡大しています。君津の主要品目であるだいこんの他にも、キャベツの生産が若い担い手を中心に増えてきました。

1 はじめに

JAきみつ管内は、君津市、富津市、袖ヶ浦市の 3 市で構成され、水田面積の合計は 5,770ha、畑面積の合計は 2,332ha になります。管内は従来から水田を利用した、さやいんげんやレタス、畑ではだいこん、らっかせい、ばれいしょなどが栽培されてきました。最近では、直売所も増え、えだまめやなばなを始め多くの品目が各地で生産されています。ここに来て、業務用需要の拡大に向けた単一品目の大規模栽培が増加してきました。

2 加工業務用キャベツの取組

平成 17 年に、袖ヶ浦市内の一人の生産者がプラスチックコンテナによる市場経由の出荷を始めました。翌年から取引業者も増え、栽培者数や面積も増加したことから、平成 21 年に鉄コンテナによる出荷が始まりました。平成 26 年には、リース会社より鉄コンテナを 200 基借り受け出荷するなど、大幅に生産は拡大しました。

平成 28 年に鉄コンテナを新規に 150 基、昨年は 250 基購入し、現在の栽培面積は 53ha、生産者 32 名、出荷先は 12 社、出荷実績は 2,000 トンにのびります。栽培地域も袖ヶ浦市内が中心ですが、君津管内全体に広がっています。ある出荷先の例では、加工業者から冷凍食品のギョウザを製造する会社に回り、「国産キャベツ使用のギョウザ」として、全国の消費者の元に届いています。

大規模な経営をする生産者も多く、キャベツのみで 10 数 ha を栽培する生産者もいます。以前はだいこんが主力の生産者も多かったのですが、徐々にスタイルが変わり、見渡す畑一面がキャベツという光景も珍しくありません。また、経営者の年齢も若く、30 代の経営者も多く見られます。

3 今後の課題

大規模な生産出荷をするためにも、畑が家や出荷場に近いたことが求められます。長く農業を続けてきたベテランの生産者の農地を借り受け、効率的な農業ができるよう、行政機関も農地中間管理機構と連携して取り組む必要があります。また行政機関は、定植機や防除機などの高性能機械の導入を促し、省力経営を誘導することも必要です。連作障害や病害虫の面では、まだ地域の問題にはなっていませんが、今後大きな問題にならぬよう、地域内の家畜ふん堆肥の活用や輪作体系の確立が求められます。将来的には、水田の整備により栽培を広げられれば、大消費地に近い利点を生かした大規模野菜産地がさらに広がると確信しています。

4 他品目での取組

このほか、以前からだいこんは、近隣の加工業者に出荷して「刺身のつま」などの加工用として使われてきましたが、最近では生産者 1 戸が数 ha の加工用だいこんを栽培し、専用収穫機を使って効率よく収穫出荷する生産者もいます。レタスも、従来のラッピングと段ボール出荷の体系から、ノーラッピングによるプラスチックコンテナでの出荷が急増しています。

これからも、加工業務用の様々な需要に向けた、野菜栽培の取組が広がっていきそうです。



加工業務用キャベツの
収穫風景



プラスチックコンテナ
に入れられたレタス

流通情報



県産品の輸出促進について

全国農業協同組合連合会千葉県本部
園芸部長 加藤 浩生

J A全農ちばでは県内生産者・J A・行政・関係機関等と連携して県産農畜産物等の輸出促進に取り組んでいます。平成 29 年度の輸出額は、約 40,000 千円（前年比 123%）となり、東南アジア市場を中心にさつまいも・梨等の取扱量を着実に増やしています。特に、マレーシア向けのさつまいもが現地での高い評価を得ており、輸出額の大半を占めています。

1 さつまいものPRに関して

平成 26 年のマレーシアにおける県知事トップセールス以降、県産品の輸出量が増加してきました。

平成 28 年には、県事業との連携によりマレーシアの小売店舗において「焼き芋機」を設置し、食べ方の提案や試食販売などによる、さつまいものPRを実施しました。「焼き芋」の試食により、県産さつまいもの甘さや品質を現地消費者へ伝えることができ、ベトナムなどの外国産と比較すると倍以上の価格差があるにもかかわらず、高い評価を得られ、店舗での定番化・消費拡大に繋がっています。

2 課題と対応について

輸出に際し、注意すべき点の一つに長期輸送への対応があります。

東南アジアへは、航空便を利用すると、現地の店舗等まで 1~2 日での輸送が可能ではありますが、コスト面から、船便がメインに利用されています。その際、輸送期間である 20 日前後の品質保持の必要性があるため、品目によっては長期の輸送に耐えられる形態での出荷が必要となります。しかし、生産現場での作業・資材等の負担を増やす事は可能な限り避ける必要があるため、梱包・出荷形態・価格などについて生産現場・海外バイヤーと調整しながら試験等を実施し、輸出量の拡大に向け取り組んでいます。

3 産地との連携

輸出経験の浅い当県本部としては、輸出に取り組む産地・生産者を増やすことで、効果的に事業を進める必要があります。そのため、シンガポールやマレーシアでの販促活動では、JA 職員はもちろん生産者と共に参加し、現地での評価の高さを実感し、輸出を身近に感じられることに重点を置いています。

今後については、これまで実績のある品目の輸出拡大に加え、新たな輸出先・品目の開発、生産者の所得向上と産地の活性化に繋がります。

4 県主催のフェア等への参加実績

○平成 29 年 9 月

マレーシア・タイ王国において、梨フェアを開催。

○平成 30 年 1 月

マレーシアにおいて、さつまいもフェアを開催。

○平成 30 年 2 月

タイ王国トップセールスに農産ミッション団として参加。

○平成 30 年 4 月

台湾の「桃園農業博覧会」へ参加し、切り花のPR等を実施。



シンガポール県産フェア



タイ王国梨フェア

野菜ニュース



千葉ベビーリーフ菜園株式会社の取組について ～国庫事業活用事例～

千葉ベビーリーフ菜園株式会社
代表取締役 鈴木 智彦

千葉ベビーリーフ菜園株式会社は、大規模施設を集積でき、消費地に近い利点がある千葉市花見川区犢橋地区において、低コスト耐候性ハウスを整備し、長期安定的なベビーリーフ生産を始めます。

1 千葉ベビーリーフ菜園株式会社の概要

千葉ベビーリーフ菜園株式会社は、平成29年に千葉市花見川区で新たに立ち上げた農地所有適格法人です。国庫事業「産地パワーアップ事業(平成29年度事業)」を活用して、低コスト耐候性ハウス約2.5haを整備し、平成30年7月から「ベビーリーフ」の生産を開始しました。



新鮮で栄養豊富なベビーリーフ

いことが問題となっていました。そこで、消費地が近く、流通の便がよい当地区を、「ベビーリーフ」の生産拠点とするべく、農地中間管理事業を活用し7.2haの水田を借り受け、当生産施設を整備しました。

3 今後の展望

千葉ベビーリーフ菜園株式会社は、【健康な物作り】【儲かる農業】を目指しています。

①健康な物作り

健康な野菜とは、2つの意味があります。1つは、消費者にとっての健康です。食生活での健康を維持する安心安全の野菜です。もう1つは、生産物が健康かどうかです。病気、病害のない高品質なベビーリーフを生産していきたいと思えます。

②儲かる農業

安心・安全、安定供給を継続し、無駄を極力なくし経営を安定させ儲かる農業を目指しています。

そのためには働いてくれる従業員の協力が不可欠で、みんなで儲かる会社へ発展させていきたいと思えます。外部からの技術サポートや関連生産法人での研修も実施し、生産技術力の強化を進めます。マーケットインの概念に基づき、提携会社と連携した販売・流通も確立し、長期安定した生産販売を図ります。

スタートしたばかりの会社ではありますが、まずは自分たちの手で作ったベビーリーフが早くスーパーに並ぶよう、そして会社が成長していくよう従業員と一丸となって尽力していきます。



ベビーリーフを収穫中の様子

導入施設の概要	
活用事業	平成29年度産地パワーアップ事業
総事業費	約2億2千万円(うち国庫補助金1/2)
導入施設	低コスト耐候性ハウス約2.5ha
対象作物	施設野菜 ベビーリーフ

2 「ベビーリーフ」の生産について

「ベビーリーフ」とは、ホウレンソウ・コマツナ他、葉菜類を発芽後15日～30日で若く柔らかいうちに収穫した幼葉の総称です。栄養価の高い野菜で生のまま食べられ、彩りや食感もよいので、今後成長が期待されている素材です。近年の需要増加に供給が追いついていない状態となっています。

他方、千葉市花見川区犢橋地区には休耕地が大規模に広がっており、その管理や、今後の担い手がいな

頑張る産地



千葉市の元気な花き生産者 — 法人経営でさらなるチャレンジ !! —

千葉農業事務所 改良普及課
普及指導員 坂倉 弘子

千葉市で主にカーネーションとシクラメンを中心に栽培する株式会社タカハシプランテーションの高橋崇訓さんを紹介합니다。平成21年に法人化し、契約と市場の2本柱の販売で、消費者動向を意識した鉢物生産を目指しています。

1 就農から現在の経営まで

千葉市緑区平川町でカーネーションとシクラメンを栽培している「株式会社タカハシプランテーション」の高橋崇訓さんは、平成12年、20歳で親元就農しました。就農当初は農業事務所主催の農業経営体育成セミナーで3年間農業の基礎や経営感覚を学びました。

現在の栽培面積は、施設約1ha(鉄骨ハウス)で、労力は家族3人と雇用8人です。栽培品目は、カーネーション、シクラメンを主に、ホームセンター向けのカリブラコア等多様な品目を生産し、技術の高さから見本鉢にも選ばれています。

出荷量はカーネーション約40,000鉢、シクラメン約30,000鉢と県内でも有数の鉢花大規模経営者で、市場や量販店を中心とした販売に力をいれています。

※見本鉢…ホームセンター等で、見本として店頭
に飾られる鉢



代表取締役：高橋 崇訓氏

2 法人経営での鉢花生産について

崇訓さんは、栽培技術が安定したことで、①経営をさらにステップアップさせたい②量販店との相対で取引する際の信用性を確保したい③将来第3者への経営継承も考え、法人化を検討するようになりました。

そして、平成21年3月、株式会社タカハシプランテーションとして、法人経営を開始しました。同時に、長年経営主として従事していた父博道氏は経営を譲り、崇訓さんが代表取締役として経営を指揮する立場になりました。

法人化したことで、量販店との商品の提案もしやすくなり、通年で商品提供ができる等メリットを感じるようになったそうです。

3 今後について

法人化して今年で9年目を迎えました。当初は売上にこだわりすぎて所得が少ない等、問題点が多く見られました。しかし、資材等の見直しを図ることで、徐々に所得は向上し、今後は原価計算等も含め再度経費の見直しを行う予定です。

商品づくりに関しては、消費者目線を常に意識し、消費者に手にしてもらいやすいサイズ、値段設定を心がけています。また、鉢のパッケージもシーズンごとに変えることで、インテリアとして変化を持たせるよう工夫しています。契約出荷だけでなく、市場出荷の注文割合の増加につなげたいとのこと。

「消費者の需要離れを少しでも解消し、1人でも多くの人が鉢花に触れる機会を増やしたい。そのために、販売を小売店や量販店に頼るだけでなく、生産者側も努力をしたい」と語る崇訓さん。

常に新しいことを取り入れようとする前向きな姿勢と努力に、今後も期待が膨らみます。



インテリアに映える
デザインにこだわった
パッケージづくり(一例)

野菜ニュース



促成ミニトマトの裂果を減らす環境制御法

千葉県農林総合研究センター 野菜研究室
主任上席研究員 鈴木 秀章

好湿性病害の発病抑制に効果がある結露センサー付き複合環境制御装置を用いて、温室内の結露値、湿度を制御することで、促成ミニトマトの裂果を減らすことができます。

1 はじめに

促成ミニトマトでは、暖房機の稼働時間が少ない初冬や春は特に室内の湿度が高くなり結露しやすく、裂果が多くなります。ミニトマトは裂果するとパックごと商品価値がなくなり、正常な果実との選別にも手間がかかることから、裂果対策が重要です。

そこで、好湿性病害の発病抑制に効果がある結露センサー付き複合環境制御装置を用いた、裂果を抑制する環境制御法の試験を行いました。

2 結露値制御による裂果抑制効果

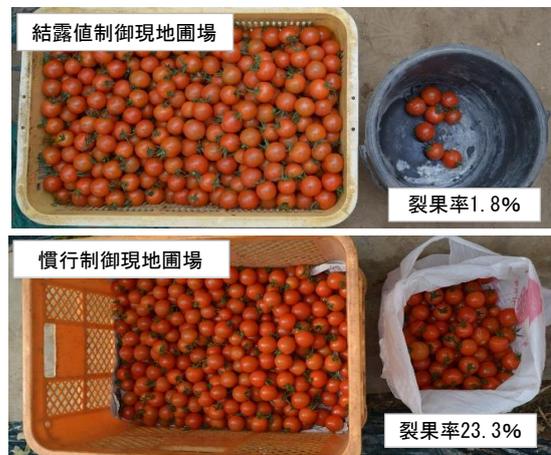
環境制御には、結露センサー付き複合環境制御装置「まもるんサリー」(鈴木電子株式会社)を用いました(以下、制御装置)。この制御装置は、通常温度制御に加えて、結露値により暖房機を制御します。結露値とは、付属する結露センサー固有の値で0~1,000の値を示し、数値が大きいほど結露しやすい(湿度が高い)環境を表します。

促成ミニトマトにおいて、制御装置を用いて結露値80で暖房制御を行うことで、結露値80を超える時間は慣行制御に比べ半減し、相対湿度も低下しました(図)。その結果、11月~12月の裂果率は約40%減少しました。

結露値80で制御した場合、燃油消費量は増えますが、裂果が減少し上物収量が増えるため収益性は低下しません。

3 現地ほ場でも安定した裂果抑制効果

現地促成ミニトマト2ほ場で、結露値80で制御するほ場と、慣行制御のほ場の比較試験を行いました。その結果、調査を行った11月14日の裂果率は、結露値80で制御するほ場は1.8%、慣行制御のほ場は23.3%となり(写真)、その後も結露値80で制御するほ場は裂果率が低く推移しました。



正常果

裂果

(調査日平成28年11月14日)

写真 現地試験の裂果の発生状況

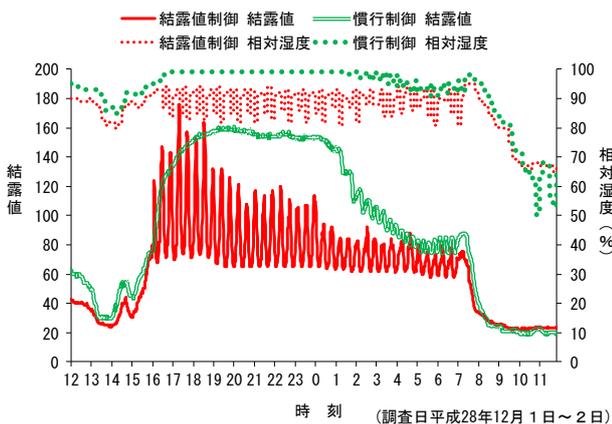


図 温室内結露値及び相対湿度の推移

4 おわりに

結露センサー付き複合環境制御装置を用いて、結露値、湿度を制御することで、裂果を減らせることが明らかとなりました。また、本制御装置を用いない場合でも、天気が悪く、裂果が多く発生することが見込まれる日には、設定温度を高めにして積極的に暖房機を稼働させる、カーテンを少し開放して湿気を逃がすなど、湿度を下げる管理を行うことで、ミニトマトの裂果を減らすことができると考えられます。

千葉県立農業大学校 平成31年度推薦入学生募集

本校は、千葉県農業の発展に寄与する優れた農業の担い手及び指導者の育成を目指しており、以下のとおり推薦入学生を募集します。

▼ 募集人員

農学科：約40名 研究科：約10名

▼ 受験資格

農学科：高等学校を卒業又は平成31年3月卒業見込みの者で、学業成績が特に優秀であり、かつ学校長が推薦する者。

研究科：短期大学卒業と同等と認定されている農業大学校の卒業生又は、短期大学の農業に関する正規の課程を修めて卒業した者。
(平成31年3月卒業見込の者を含む。)

▼ 試験期日 平成30年10月25日(木)

▼ 試験場所 千葉県立農業大学校

▼ 試験内容 **農学科**：小論文及び面接
研究科：小論文及び面接

▼ 願書受付 平成30年9月28日(金)
～10月12日(金)

▼ 合格発表 平成30年11月1日(木)

▼ 問合せ先

詳細は、下記までお問い合わせください。
千葉県立農業大学校庶務教務課
〒283-0001 千葉県東金市家之子1059
TEL 0475 (52) 5121 FAX 0475 (54) 0630
<http://www.pref.chiba.lg.jp./noudai/index.html>

“千葉なし味自慢コンテスト” 開催のお知らせ

このコンテストは、県内で生産される梨の品質向上と消費拡大を目的に毎年開催しています。

本年は、甘さと酸味のバランスが絶妙で濃厚な味わいの「豊水」を対象に、県内産地から100点を超える選りすぐりの梨を集め「千葉なしナンバーワン!」を決定します。

期間中は梨の試食を行うとともに、最終日には小学生以下を対象としたゲームやコンテスト出品物の即売をします。

たくさんの皆様の御来場をお待ちしております。

1期日 平成30年8月25日(土)～26日(日)
25日(土) 専門家による審査。

審査の様子を御覧いただけます。

26日(日) 午前11時から一般来場者の方
先着50名様に食べ比べていただき「あなたが選ぶ千葉なしナンバーワン!」を決定します。

午後3時から、展示品の即売。

2会場 イオン津田沼店1階センターコート
(新京成線新津田沼駅下車徒歩2分)

3問合せ先 千葉県農林水産部生産振興課
TEL 043 (223) 2872



専門家による品質審査



上位3賞に輝いた梨の展示